

事業名：自主研究グループ
グループ名：福山国語研究会
所在地：福山市引野町南二丁目17番1号
H P：なし
構成数：13名

1 研究の概要

(1) 研究テーマ及び研究のねらい

①研究テーマ

国語を適切に表現し、正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高める指導と評価について

②研究のねらい

本会は、平成元年に福山市の複数の学校の教諭が集まり、国語科の協同研究を始めた自主的なサークルである。その目的は、福山市の国語教育の課題を解決するとともに、人材育成の場を提供することであった。当時の課題は次の五つであった。

- ア 理論の構築
- イ ネットワーク作り
- ウ 実践の蓄積
- エ リーダーの育成
- オ 取組みの共有

これらの課題解決に向けて研究組織や体制を作り、次のように17年間協同研究を進めてきた。

(2) 研究組織・体制

- ① 会員 小学校教諭 (福山専修管内を中心に10校、13名)
- ② 指導者 広島県教育委員会の指導主事
- ③ 役割分担

運営・司会	成果物の収集	参考図書のみとめ
毎月の記録	親睦会企画	会場予約
毎月の案内	会計	名簿等作成

④ 活動内容

- ア 月に一度の研修
- イ 教材研究
- ウ 単元計画の交流
- エ 計画に基づいた実践の分析
- オ 学習指導要領の領域別指導事項の整理
- カ 評価規準の作成
- キ 領域別年間指導計画の作成
- ク 実践記録書作成

(3) 研究内容

※会の研究理論を構築し、次の①～④に基づき研究をする

① 研究仮説

本年度は、研究の領域を「書くこと」に焦点化し、次の研究仮説に基づき、いずれかの工夫点を各会員が実践に取り入れ、授業改善に取り組んでいる。

国語科「書くこと」の学習指導において、次のような点を工夫すれば、言語に対する興味・関心を高めるとともに、書いて伝える能力を高めることができるであろう。

- ア 相手意識・目的意識をもって書く場を設定し、主体的な学習を成立させる。
- イ 「書く」と「話す・聞く」「読書」活動の関連を生かす。

- ウ 体験的な学習活動や問題解決的な学習過程を工夫する。
- エ 一人一人の興味・関心や学習状況を生かすために、学習内容・方法等を多様化する。
- オ 自己の可能性や課題に気づき、次の学習への意欲をもてるような評価を工夫する。

② 仮説検証の視点

③ 仮説検証の方法

④ キーワード

- ア 相手意識・目的意識を持った言語活動
- イ 各言語活動の関連的指導
- ウ 国語科における体験的な学習及び問題解決的な学習
- エ 学習内容・方法等の多様化
- オ 評価の工夫

2 授業改善の視点

(1) 「書くこと」の指導と評価に係る理論研究

大西道雄先生 (安田女子大学) を招聘

(2) 「書くこと」の年間指導計画の作成 (小1～小6)

(3) 研究仮説に基づく実践研究

① 「指導案作成枠」の活用による単元構想の検討

「付きたい力ー実態分析ー指導の工夫ー評価」が整合せず、付いた力や工夫点の有効性の検証が不十分であるという課題があった。そこで「指導案作成枠」を考案し、文章でなく、整理した表を使っての事前検討を徹底した。

項目	付きたい力1	付きたい力2	...
学習指導要領 指導事項			
単元のねらい			
単元観			
児童観			
指導観			
工夫点			
評価規準			
具体的指導・支援			
指導の結果			
成果と課題			

② 実践の分析とまとめ

実践後は、設定した検証の視点と方法に基づき分析し、文書提案をする。ここで分析の客観性・妥当性を検討し、授業実践の課題を明らかにする。最終的に実践誌に掲載し、会としての成果と課題をまとめた。

3 研究の成果と課題等

(1) 成果

- ① 同じ講師による長年の継続指導により、会の研究の歩みを踏まえた研究の方向付けができた。
- ② 「書くこと」の年間指導計画の作成により、付けるべき能力の整理、6年間の系統的な指導の計画ができ、会員で共有できた。
- ③ 「指導案作成枠」を活用した単元構想により、付きたい力に対応した実態の分析と、実態に応じた指導の手立てが明確になった。
- ④ 授業記録や作品を共同で時間をかけて分析・検証することで、より客観的な考察ができるようになった。

(2) 課題

- ① より客観的で妥当性のある児童の作品分析や評価の仕方等の研究を進める。
- ② 指導案作成枠内に会の工夫点ア～オを加えて、＜仮説ー検証ー成果と課題＞がつながる実践のまとめをする。

4 実践事例

- (1) 学年・教科等名 小学校第1学年 (35名) 国語科
 (2) 単元名 「したこといろいろ」東京書籍
 (3) 単元の目標

本単元で付きたいことばの力

- 自分の経験を思い出し、進んで文章を書こうとする。(国語への関心・意欲・態度)
 ◎伝えたいことをはっきりさせ、学校での出来事を家の人に書いて伝えることができる。(書く能力)
 ◎句点の打ち方を理解して、文章の中で使うことができる。(言語についての知識・理解・技能)

- (4) 単元設定の理由 (省略)
 (5) 仮説の設定と検証の視点及び方法
 ①仮説

書くことの学習において、次のような点を工夫すれば、書くことの楽しさを味わいながら、語と語や文と文との続き方に注意して書く力を育てることができるであろう。

②工夫点 (会の工夫点に対応させる)

ア 学校生活の中で楽しかったことを家の人に伝える場の設定をすることで、相手意識・目的意識をもった言語活動の場を設定し、主体的な学習を成立させる。

会の工夫点ア 相手意識・目的意識

イ 3色のカードを用いることで、ねらいの達成感を視覚的にとらえさせ、主体的な学習を成立させる

会の工夫点ア 目的意識

ウ 「～は…しました。」という第1文を示し、視点を明確にしながら後に続くモデルとなる文を考える場を設定することで、問題解決的に書く学習を成立させる。

会の工夫点ウ 問題解決的な学習過程の工夫

③検証の視点及び方法

検証の視点	検証の方法
1 書くことの楽しさを味わうことができたか。	ア 観察 イ ワークシート分析
2 語と語や文と文との続き方に注意して書くことができたか。	ア 観察 イ ワークシート分析

④単元の計画

次	学習活動
第1次	教材文を読み、句点に注意しながら視写する。 (家の人から学校の様子が知りたいという内容の手紙が届いたので、それに応えるという場の設定)
第2次	伝えたい相手と題材を決め、伝えたいことを友達に話す。「書くこと」と「話すこと聞くこと」の関連
第3次	経験したことや感じたことについて、色カードを使って3文書く。(モデルとなる文を作る場の設定)
第4次	文章を見直し、清書する。 家の人からもらった返事を発表する。

(6) 分析

【検証の視点1】書くことの楽しさを味わうことができたか。

ア 観察

あらかじめ学級通信で児童が手紙を家に持って帰ることを伝えておき、肯定的な返事を書いて渡してもらえよう、各家庭に依頼した。35名のうち32名の児童がうれしそうに返事を持ってきた。残りの3名には教師が返事を書いて渡した。

一方的な伝達ではなく、相互のやり取りをすることで書くことの楽しさを味わうことができた。

イ ワークシート

意欲的に学習に取り組ませるために、3色の短冊状のカードを用い、1文目は赤カード、2文目は黄カード、3文目は青カードに書くことにした。こうすることで、児童に青カードまで書くことが、本単元のねらう姿だということを視覚的に理解させることができた。その結果、全員がスムーズに青カードまで書き進めることができた。【検証の視点2】語と語や文と文との続き方に注意して書くことができたか。

ア 観察

主述のある1文をやっと書けるようになった児童にとって、3文に分量を増やすことは容易ではないと考え、一斉指導の中で児童と一組ごモデルとなる3文を作っていく場を設けた。

<児童の反応から作ったモデル>

第1文	ぼくは、あさがおにみずをやりました。(赤カード)
第2文	〇〇ちゃんとやりました。(黄カード)
第3文	おおきくなったなとおもいました。(青カード)

1文目はこちらから提示し、2文目以降は、「誰とやったの?」「どうなっていた?」と視点を意識させながら導いてその反応を文章化して板書した。

また、視点をマークにしたもの(いつ:時計の形、見たこと:目の形、したこと:手の形、思ったこと:ハート等)を2文目以降のカードの上に貼り、視覚的に何を書けばよいのかをとらえさせた。

モデルを参考にしながら、ほとんどの児童はスムーズに3文目まで書くことができ、4文目まで書き進めた児童は2名だった。

モデルを示す前に、児童一人一人が自分の伝えたいことを明確にしておくことが、モデルをそのまま真似しないポイントであることも分かった。

イ ワークシート

児童が2文目に書く内容は、「誰と」(61%)「いつ」「したこと」(各11%)、気持ち(17%)であった。そのつながりに課題(順序性、重複)のある児童が3名いた。(省略)

(7) 成果と課題

①成果 (ア・イは工夫点について、ウは分析について)

ア 児童が家の人に伝える場を設定することは、児童に相手意識・目的意識をもって書く活動をするのに有効だった。

イ 3色のカードによって、ねらう姿を児童に視覚的に理解させることができた。また、1文ごとのカードにし、1枚書けるごとに色の違うカードを取りに行きながら書くという活動は、入門期の児童にとって興味を持続する方法として有効だった。

ウ 児童の書いた各文の内容を分析することにより、視点として何が必要か、どのような内容を書く言葉を増やせばよいか、文の順序をどのように考えさせればよいか等が分かった。

②課題

「気持ち」「したこと」を表す内容について書いた児童が少なかったため、それらの言葉を増やすために生活科なども活用しながら、みんなで考える場を設定していく。さらに、本単元で示した視点とマークについて、今後、継続的に使用し定着を図る。